

で法政大学卒業。勤務した憐JUKIでも、たまたま社員食堂で同席した、現社長山岡建夫氏との雑談から研修センター所長に抜擢され、ロシア、中国の研修生とも親交し、定年後も更に五年勤め上げた。

まさに平氏の重厚な人格の賜である。現在六十九歳。秦野市に健在である。

(岐阜県引揚者団体連合会)

理事長 川村 一正)

回想記

山梨県 坂本 滋子

私は、一九二三年(大正十一年)一月三日、東京で誕生。七十四歳です。振り返ってみますと、私の生涯の基、方針は東京での十五年間、旧満州国で暮らした十年間の生活、この二十五年で決められたように思います。殊に後の十年間は青春時代になり、影響は更に大きいと言えましょう。異国での思い出は鮮明に美し

く、また、悲しみさえも懐かしく浮かんでまいります。昭和二十年。余りにも大きな変動の年でした。八月十五日は、日本の終戦記念日であり、日本人のだれもが悲嘆にくれた長い一日でございました。私どもの年代の者は、毎年八月に入ると、そろそろその日のことを意識して落ち着かなくなります。話はいつか敗戦の苦労話になり、また、お互いに親近感を持つきっかけになったりもいたします。

通河事件

四月の初めのころでした。朝六時前、鏡台に向かってみましたら、「ボン・ボン」と何か耳慣れない音が聞こえてきました。間もなく人が訪れる気配があり、夫は「ちょっと会社の方に行ってくる」と緊張した面持ちで身支度して出掛けて行きました。会社は、地続きで高い塀を巡らした中にあります。

私どもは、昭和十九年の五月に佳木斯で挙式。夫が婚約後、通河出張所勤務になってましたので、松花江を船で遡って、船中二泊の旅が、新婚旅行のようなものでした。この川は、夏は船が運航しますが、冬期間

は氷結して、歩いて対岸の方正まで行くようになって
いると聞いておりました。通河に着いて一カ月ほど、
社宅がなく埠頭近くの拓士会館に部屋を借りました。
夏になり、小学校の官舎が一軒空いているからと言
うので、借家を申し込み、移転しました。ところがまた、
十二月に新任の先生が入るため、明け渡すことになり、
取りあえず会社の独身寮に移っておりました。あとで、
この松花江の結氷と、家を三度も変わっていたことが、
私にとって天の助けとなりました。

寮の他の部屋の独身男性たちも全部会社に行っ
てしま、ぼつんと部屋に一人座っていましたら、どやど
やと、会社の若い女事務員たちと社宅の奥様方、子供
さんたちが入ってきました。暴動が起こり、日本人た
ちが危険にさらされると初めて分かりました。

男性たちは、銃や他の武器を持って正門を固め（二
十人ほど）、女性は子供連れを一番奥の部屋に入れ、
私たち若手組は薪を手に、気負い込んで裏手入口に立
ちました。表に出てみましたら、近くで聞くのは初め
ての鉄砲の音が「ピューン、ヒュル、ヒュル」と不気

味な響きで耳をかすめていきました。突然、裏門の辺
りが騒がしくなり、ドンドンと戸を激しく叩きだしま
した。すわこそ。と私たちは身構えましたが、その音
もちよつと休み。また、思い直して叩いているような
調子を感じられ、そんなに怖くなくなりました。私は、
夫と街を散歩したとき、それぞれの家、建物に、塀が
巡らされてますが、我が満拓ほど頑丈な門がなかつた
と覚えてますので、簡単に破れるものではないと感じ
てました。けれどもこれは、相手の正体を知らなかつ
たから言えることで、実際は既に三十八人の日本人が
殺されていたのでした。

会社は街のはずれにあつたため、暴徒の来襲も遅く、
外からの連絡もあつたので守りも固く難を逃れました
が、事件は十六日未明に起こり、寝込んでいるところ
を踏み込まれた家は、若い日本青年が起き上がる間も
なく、銃を抱えてよろよろと足取りもおぼつかないよ
うな（ロートル）老人に、寝ていたところを上から頭
を撃たれ即死だったとか。母と姉の目前で起きた無惨
な事件でした。あとで分かったことは、通河警察署の

反乱で、署長（日本人）を恨んだ警士（満人）が牢内の囚人を解放し、倉庫の武器を奪って逃げ、匪賊と合流し、三百人ほどで暴動を起こしたのです。通河在住八百人の日本人皆殺しの計画だったそうです。

その夜、日本人は宮林署の建物に集結することになり、夕方の風の吹く街の通りを一群となって走りまわりました。そのときも例のヒュルヒュルという音が聞こえていました。宮林署の中は、恐怖に引きつった顔が多く、今更のように事の重大さを知りました。中でも一際目立ったのが、街外れの小学校の小宇佐校長の奥様と隣家（私の借りていた家）の女教師の駆け込んできた姿でした。

息を切らしながらの話は、校長先生が急を知り街に駆けつけた留守に、一団が二軒の家を取り囲み、まず女教師が隣に逃れ、赤ちゃんと三人で押し入れに隠れたところ、家に土足で上がり込み、部屋中央に何か積み上げて火を付けられ、恐ろしさにたまらなくなり、家を飛び出し、校門目指して走り出した後から何発も銃を撃たれ生きた心地もなかったとのこと。聞いて

こちらが青くなってしまいました。地下室も風呂場もある新しいきれいな家で、名残り惜しかったのですが、もし、あのまま住んでいたら、私がこのような目に遭っていたのです。銃に撃たれて命を失ったのかもしれないのです。事情が分かってくるにつれ、更にゾーンとしました。私どもが最初に部屋を借りた拓士会館の責任者だった原様と、別棟の住人だった竹本様と、満拓関係で二人の犠牲者が出てしまいました。宮林署には一晩泊まり、翌日は解決したからと帰宅できました。松花江の結氷が溶け、川を徒歩で渡れなくなる時期を狙っての反乱だったのが、いったん溶けかかった氷が、十六日の寒さでまた凍り、援軍が渡れるようになり、氷の上を駆けつけ、山に逃げた匪賊も全部掃討されました。街中は、しばらくはこの話で持ち切りでした。

一カ月も過ぎたころから、ぼつりぼつりと男の人に召集令状がきはじめ、火山様、古市様、毛塚様、菅原様と応召して行き、やがて七月、夫にも召集令状がきました。「速やかに荷物をまとめて弥栄村に帰ること」

夫はこう言って出発して行きました。春の通河事件以来、彼は相当切迫した情勢を感じていたようでしたが、世間知らずの私はなんともんきなものでした。同じ新婚で、出征兵士の妻となった奥様と仲良くまだまだ暮らしていたい気分でした。けれど、出征前の彼の緊張した命令をおろそかにできず、谷本夫人に手伝っていただき、やっと荷造りを始めました。赤ちゃんもおりませんし、弥栄の両親の元で、彼の帰りを待っておればよいのだと思うと、送り出した寂しさも、不安も、少し薄らいだようでした。

弥栄村回想

父は、昭和七年秋。五百人ほどの第一次武装移民団の警備指導員として渡満。十一年秋の家族召致で、私どもは、三三省樺川^{カシウ}県^{クワン}弥栄村^{ミエ}に迎えられました。そのときは行政は団から村制に変わり、父は村長になっておりました。以来、私は十九年五月結婚まで、弥栄村におりましたので、八年間、開拓村の娘でございました。もっとも前半は、旅順高等女学校寄宿舎であり、卒業後も一年間東京の親戚宅で稽古事を学んでおりま

した。

在学中は、旅順―弥栄間を、泊まりが新京・ハルビン・牡丹江、あるいは車中で一泊を入れて、片道三日及び四日の長い道のりを、六回も往復帰省しておりました。切符を買うのに、弥栄駅は新しくできたため、駅員に「そんな駅はない」と言われ、「佳木斯^{ヂヤムス}の近くです」と言うのと、やっと分かってもらえるので、友達から「ヂャムス」と渾名を付けられました。時には、村長の娘とも。車窓から眺めた風景。泊まった町々の印象は、女学生らしい観察でしたが、断片的に深く焼き付いており、知っている地名を聞くと、今でも懐かしさに心が震えます。

旅順の女学校は、明治四十三年旅順市街に、国立高等女学校として誕生。大正三年九月に関東庁立旅順高等女学校と改称され、女子師範もあり、合計八百人ほどの生徒の半数は寄宿生でした。旅順市には、開拓の父と言われた東宮大佐の留守宅。第二次千振開拓団長の宗様の留守宅があり、父に連れられ御挨拶に伺いました。殊に宗様には、旅順高女三年先輩と一年後輩の

御姉妹がいらっしゃるので、日曜ごとと言ってよいほど遊びに伺ったものでした。父が最初に渡満するとき、家族で東京駅に送り、武装移民団としての凛々しい印象を受け、送ったあと、階下のホールで、眼光他を圧し、思わず瞠目するような方に出会い、その方が、満州開拓に大変関係の深い加藤完治先生と知りました。このようにして、少しずつ私も開拓関係の皆様に、自然と馴染んでいったのでございます。

アカシヤの街

商業都市大連と言いますと、对象的に、日露戦争跡の白玉山、爾靈山などがあり、聖地旅順と称えられ、旅順もアカシヤ並木の美しい街でした。日曜日の外出に、親しい友と馬車マヂヤに乗り、微かに甘い香りの漂う中を揺られて町を走るとき、ロマンチックな思いは最高に達しました。夢多き乙女のころにふさわしい幸福な女学生時代を過ごしました。広瀬中佐の歌にでてくる、戦死と伝えられた杉野兵曹長も、実際は生きていて、旅順に住んでいると聞きました。あのころ歌になったり、教科書などにも戦死として扱われながら、ひっそ

りと生きて行くことのつらさは、どんなものであったかと、身にしみて察せられました。

二・二六事件

昭和十一年二月。東京の女学校二年生のときでした。午前中の二時間目。担任の先生が緊張した面持ちで教室に入っていらっしゃって「今から直ちに下校するよう。途中は静粛にして、帰宅後もいたずらに流言飛語に惑わされないよう」と申し渡され、何も分らないまま急ぎ身支度をして校門を出ました。道を歩きながらも、電車に乗っても皆口数も少なくおとなしく、異様な雰囲気でした。家に帰りましたら、母と姉が今日虎の門病院に行ったら、道すがらやはり、訳が分からないけれど物々しい感じがして変だった。と話して顔を見合わせておりました。翌日の新聞、号外、ラジオで次々と入ってきたニュースは驚くことばかり。戒厳令と言うものも初めて聞く言葉でした。「兵ニ告グ」のラジオ放送には、しがみつくようにして聞き入りました。「勅令ガ発セラレタノデアル。既ニ天皇陛下ノ御命令ガ発セラレタノデアル。(中略)今カラデモ決

シテ遅クナイカラ直チニ抵抗ヲヤメテ軍旗ノ下ニ復帰スル様ニセヨ、ソウシタラ今マデノ罪モユルサレルノ「デアル」。あの有名な言葉には、自然と涙を流して聞き、兵士たちの一日も早い帰順を祈りました。新聞、雑誌などで親しみを持っていた高橋是清翁が殺され、また、撃たれたと報道された岡田首相が実は生きていて、義弟が間違って撃たれていたなどなど。驚くことの連続で、政治の難しさ、社会情勢の複雑さに、なんとなく前途多難を感じさせられた事件でした。

このときの反乱兵と言われた人たちが、秋に「これから寒さ厳しい満州に派遣される。かわいそうなので皆さん、ひっそり静かに見送ってあげましょう。沿道に並んで、決して旗を振ったりしないように」と先生の注意を受け、私たちは涙の目で、黙々と行進する兵隊さんたちを見送りました。多感な乙女心に強く焼き付いた事件でした。この兵士たちの中に、落語家の柳家小さん師匠がいたとは、後年知りました。

同年十月に私どもは渡満いたしました。

開拓村の生活

昭和十五年四月。妹玲子の旅順高等女学校入学のため、忙しい母の代わりに私が旅順まで同道、入学式に出席いたしました。卒業後一年ぶりで懐かしい諸先生にもお目にかかり、途中、親友の家に泊まったりして旧交を温め、すっかり満足した私は、いよいよ開拓村の娘として生活を始めました。

都会育ちの娘が村の生活に嫌気がさすのではと、父は心配したようですが、私にとっては毎日が珍しく、活気に満ち、全然退屈など感じませんでした。

電気無し。燃料は薪。水は毎日お金と引き換えにくんでもらいます。石油ランプのホヤ磨きは、末の妹の範子が一番上手になりました。薪は家の前に棚のように高く積み、時々薪割りの人が簡単に割ってくれます。水くみも、皆、先方としては小遣い稼ぎなのです。私は、東京時代タイプも修得してましたので、弥栄村開拓共同組合の会計室に勤め始めました。預金の方も受け持って、窓口、帳簿と目を通して、村の大多数の人の顔と名前が一致するようになりました。

村の人もきつと、村長の娘はどんなだろうと、好奇心で見にきますので、私の顔も割合皆さんに覚えられたようです。

私たちは、十三年ごろから、病院、小学校の近くの小高い位置に、二軒建てられた中の一軒に住んでおりました。お隣は弥栄病院長公舎です。ランプ生活から別れたのは何年ごろだったか？ 範子が受験勉強のときはまだランプの灯だったように覚えております。電気がついたとき、夜も、余りに部屋の際の塵などが見え過ぎ「ランプの方が情緒があるわね」と生意気なことを言ったりしましたが、電気がついてから村の諸事業が急速に発展しました。

高松宮殿下弥栄村御視察。昭和十五年六月。

このことは、何と云っても村を挙げてのハイライトになります。弥栄村本願寺の奥様と一緒に、御昼食時の接待役選ばれました。

まず、一週間前に軍医さんの健康診断が行われ、私は南瓜の食べ過ぎで手の平が少し黄色くなっていたため、首を傾けられました。病院の早坂さん、小又さん

たちが、一生懸命に「これは、ここでとれる南瓜が余りおいしいので、村の女子おなごはほとんどこのような状態になっている」と説明して検査は通りました。

注意事項は、一、これから毎日入浴のこと。二、風邪をひかないよう。おなかをこわさないよう。清潔にして、当日は朝風呂に入ってくる。服装は何でも良いが、その上に新しい割烹着を着用のこと。割烹着は軍で預かり、消毒して当日渡す。履物も消毒、と厳しい条件でした。私ども二人は、学校で習ったお作法を思い出しながら稽古して当日を待ちました。そう、検便もありました。父たちも大変でした。模範農家を選定し、御案内するコースや時間割などなど。細々と打ち合わせておりました。お食事は軍の方で用意することでした。

当日、軍隊から渡された割烹着は熱気消毒で情け無いほどしわくちゃで、テーブル掛けも消毒したため、しわだらけでした。恭しく捧持して、殿下の前の机の上に広げましたら、「何？これ」と宮様は笑っておっしゃいました。「消毒してございますから」とお答え

すると、「こんなことしなくて良いのに。おかしいね。

この花はだれが活けたの?」「校長先生の奥さんです」私も普通にお答えしてしまいました。茶目ぶりはこれにとどまらず、福島部落の斉藤午治さんの家に父たちが御案内したときも、スタスタとお一人離れて楽屋裏になっっている部屋を覗かれ、ニッコリされたり、等々。好感の持てる話題は尽きませんでした。

一緒についていらっしやった方の中に、山下泰文閣下も見え、御陪食のあと、説明申し上げるとき、宮様の前で平気で居眠りしていたのはさすが勇将と、こちらでも話で持ち切りでした。以後、村には毎日のように名士・文士などが訪れその対応に明け暮れました。

行政も事業も作柄もすべて順調で、十年、十一年生まれの二世も、十七年、十八年には新入生として元気に入学してきました。私は、十八年からは小学校の方に勤めており、校長先生の毎日の御指導、監督の下に一学期の間、二世の学級担任になったこともあり、村の方たちのお付き合いはますます親密になっておりましたが、十九年五月。縁あって満州開拓公社社員の一

夫と結婚、弥栄村を去りました。

夫忠召のあと、私の帰って行く所は、慈愛溢れる父母の元、あの活気に充ちた弥栄村のほずでございました。

避難行

通河を去って佳木斯埠頭に到着は、昭和二十年八月九日の朝六時。出迎えの親戚の者から、佳木斯は今朝未明にソ連機の空爆があったと聞きました。その日は弥栄までの切符が取れず、早速、満拓佳木斯地方事務所を訪れ、佐々木総務課長さんから証明書をいただき、駅に戻り十日の切符を入手、親戚に泊まり十日に乘車しました。埠頭や、ごった返してる駅の状態といい、発車間際に駆け付け乗車した軍関係の家族の慌てふためきぶりに、風雲急を告ぐの感。弥栄駅に降り立ち、どうやら心安まり、一人で家に向かっていたら母と会いました。弥栄でも、最後の召集で男性はほとんど出征し、その見送りの帰りとか。家に着き、「よろしくお願いします」と手をついてあいさつをしますと、「ここにもお仲間がたくさんいますよ」と優しい眼差

しで迎えてくれました。ホッとしたのはその一晚だけ。翌日の夕方、佳木斯高女寄宿生の妹が「やっと帰れたわ」と背負ってきたリュックサックを玄關先のテーブルの上に置き、そのまま少しおしゃべりをしていました。たら、保健婦さんが訪れ、「村公所の様子が慌ただしい。村を出て行くのでは？」と知らせてくれました。

父は帰っておらず、「そんな馬鹿なことが……ここは佳木斯の人たちが疎開してくるはず」と半信半疑で役場に電話したら、父は部落への伝達に忙しく、代わりに電話交換手の人が「一村挙げて疎開」と知らせてきました。

何と云うことか！私の荷物は通河から届いておらず何も無し。妹も寄宿生活のため持ち帰ったリュックサックだけ。あとは家の物の整理なので、妹と協力して写真類の整理や、帯をほどき、芯地を出して、衣類が少しでも入るように、葛籠型のリュックサックを作り、嫁ぐとき、地味な着物は家に置いて言ったのでそれを詰め込みました。

夜半三時ごろ、やっと父が戻り、ゆっくり話し合う

間もなく書類の整理。ここはいずれ戦場になり、敵が入ってきた場合を考え、[㊦]の書類を火鉢で焼き、銘々が黙々と処理していくうち、突然母が顔を手で覆ってしまいました。母はどんなに辛かったことでしょう。今まで築き上げた栄光の弥栄村が一瞬にして消えて行くと感じたのですから。

朝六時。弥栄駅前集合の伝達に、だれもが夜を徹して整理、準備し、そして雨の泥んこ道を子供を背負い、手を引き集まったことは、五十年経った今でも、あのときの光景を思い出すと涙があふれてくるのです。救われるのは、終戦布告前だったため、女子供、老人ばかりの群れに、中国住民たちが少しの暴力をもふるうことなく、遠い部落から、満人傭人に馬車で送られてきたり、朝六時に集まり、列車に乗れたのが夕方八時前。この長い時間に、御馳走を作り、天秤棒に担いで届けてくれたりした住民のあったこと。内心はいざ知らず、表面は名残を惜しまれながらの離村でした。飼犬のフジが、貨車に乗り込んだ私たちを、尻尾を振りながらいつまでも見上げ離れなかったのです。

この列車は無蓋貨車で、途中止まるたびに増結したらしく「カーブのとき振り返ったら、あまり長いのでびっくりして、そのことが一番印象に残っている」と、後年、妹がぼつりともらしたことがあります。五昼夜、私たちは行き先も分からないまま貨車で過ごしました。弥栄を夜立ち、明け方に「佳木斯だ」と言う声に驚きました。普段は一時間半ぐらいのところを何時間もかかって着いたのでした。

また、夜空に輝く星を敵機と間違え、全員息をひそめ、大雨のときは頭からびしょ濡れは当然。雨水が胸から、おなかからすーすー流れていき、母と妹と私の三人は、しっかり体を寄せ合って毛布を被っていても、齒が「ガチガチ」と音を立てて震えが止まらず、雨が上がったあと、強い真夏の太陽の下、だれの体からも湯気がたちのぼっておりました。悪臭とガスが充滿し、卒倒した人もあり、赤ちゃんはこのときですっかり弱り、綏化に着くまでにも何人も亡くなったようです。息抜きに、屋根代わりに角材の渡してある上にはい上がりましたら、おなかに巻いてきたお金を並べて乾か

している人がいて、思わず笑い合いました。このような思い出のある私たちは、避難民の中でも何と運が良かった方でしょう。

この長い列車に乗れず、取り残された開拓民の方々の無様な有様を、私は内地（日本）に帰って何年も経って知りました。

玉音放送のあったと言われる十五日は、まだ貨車の中でした。綏化に行く途中の駅に止まったときに、ホームに将校らしい人が腰掛けた前に、何列か並んだ兵隊たちが膝をつき、頭に日の丸の鉢巻きをして、肩を震わせ、拳を膝にうつむいたり、目に当てて天を仰ぐような姿勢をしたり、真実、芝居をみてるような光景でした。何と大仰なと感じたのですが、まさか日本が負けていようとは、夢にも思いませんでした。

八月十七日ごろ、綏化に着き、暑い日差しをうけながら、トボトボと飛行場格納庫目指して歩いているときもまだ知らず、着いてから「日本は負けたんだって」とヒソヒソと伝わってきました。綏化の駅からここまで、足をひきずっての行進は、難民の群れとして住民

たちは見ていたのです。へたへたと力尽き座り込んで、そのときから避難民になり下がってしまいました。格納庫のコンクリート床に板を並べ、むしろを敷き、三千人ほどが生活を共にしました。何をどうやって食べていたのか、食堂経営者の家族と同じグループでしたので、主人夫婦の一声で姉妹たちが瞬間に調理したり、配給された物を分け合って、普段から小食だった私は、別に足りないとは思いませんでした。が食べ盛りの人にとっては少なくて大変でしたでしょう。子供や孫たちと一緒に、近所の野菜畑に無断調達に行ったりしたこともあります。これは思えば大変危険なことでした。

一週間もしないうちに広場で市が立ち、余り大勢の避難民団体なので暴力による露骨な略奪騒ぎはなく、朝鮮人がソ連兵を案内してくると、私たちは頭を下げて通り過ぎるのを待ち、あとで棟ごとにリーダーを通してお金、時計、衣類などの要求がありました。格納庫は三棟あると聞いていましたが、はつきりしません。同じ棟の端の方に朝鮮人の団体もあり、威張って盛ん

に気炎を上げていましたが、広い建物なので端の方のことは気にかけないことにしました。

弥栄団員が五十人ほど軍隊から帰ってきましたので、使役のときなど他団体より率先して出て行き、力強い存在でした。

このような生活が一月も続くと、北満の夜気は身にしみ、あちこちから咳が聞こえ、下痢患者続出、建物内は音が反響して、耳・頭の中に刺さるようでした。幼児も次々に死んでいき、笑顔が見られなくなり、つくづく限界だと思ったとき、満人に知られないように移動すると通達があり、石ころの道を線路伝いに歩き、真っ暗闇の中を声も立てず、手探りで貨車によじ登り乗り込みました。あのとときの恐怖感は今も夢に見ます。若さで乗り切れましたが、今でしたら…なんと恐ろしいことでしょう。

今度の貨車は、屋根はありましたが、二カ所ほどの鉄格子入りの明かり取りだけ。出入りの扉を閉めると暗くなりますが、これで助かりました。扉は走っている間だけ開け放し、いったん止まるとピタリ締め切っ

て声も立てずに蹲って満人の暴力から逃れます。入れないので屋根に上り、明かり取りの鉄格子の間から、太い針金の先を曲げた物を入れて私たちを叩き、どけさせて、わずかしかない荷物を取り上げようとします。私たちも、走っている間にリュックサックなどは下に並べ、上にシートをかぶせて座り込みました。叩かれるのは覚悟の上です。小孩(子供)・老頭児(老人)から叩かれるのは悔しいけれど、荷物を渡してなるものかと必死で頑張りました。扉を開け放して青い広野の中を走るときは生き返ったようで、大声で話したり「弥栄に三石の仕込んだ酒を置いてきて惜しいことをした」などと笑ったりしました。

駅でなく人気のない原野の中で列車が止まると、飛び降りて木を燃やし、アツという間に肉汁などをつくってしまいました。前と同じグループでしたが、臨機応変のこの遅しさに大いに励まされました。この佐藤食堂の娘さんのトミちゃんは、母の裁縫のお弟子さんであり、私の仲良しだった関係もあり、綏化にいたとき、持っていた錦紗の着物一枚をあげました(今年、北海

道で弥栄会があったとき、会えて、お互いその話をしました)。

この辺りまで元気だった私が、ソ連兵の女狩りを心配した母や周囲の人に、顔に鍋墨を塗られた直後から顔中腫れ上がり、熱は四〇度近く、腹痛がひどく、列車の振動にも耐えられないほどの苦しみをしました。けれど母は、かえって安心したそうです。敵は伝染病が怖く、病人を非常に恐れると聞いたからです。何日たったか分かりませんが、新京駅に着き、ほとんどの人が降りて行きました。弥栄だけは、今年日本へ帰れないだろう。越冬するなら少しでも暖かい方がよい。港が近い方がよいと、大連まで下ることに父たちの間で決まっておりましたので、降りませんでした。満拓の佐々木総務課長が、わざわざ挨拶にこられて、社員手当を渡してくださいました。このお金が大連に着いてから本当に役立ちました。

新京を出てホツとしたのも束の間、奉天で下車を命ぜられ、父の報告書によると、奉天はそのころ、最も治安が悪く、最悪の事態だったとのこと。万事窮

すの心境で、それでも交渉の結果、お金を出し、また乗車を許されたとか。私はもうこのときは目もあけられない状態で、乗り降りには担架でした。貨車でなく客車に座ったのは覚えていますが、後は分かりません。周囲の人は「滋子さん、もう死ぬね」と子供同士話し合ったとか。発車まで、やはり略奪があったようです。後で聞いた話によれば、私たちの車は最先頭で、先端がホームからはずれており、後ろの降り口に乗り込んできた酔ったソ連兵が大の字になって寝てしまい、満人のチンピラたちが乗り込めなく、被害を免れたとか。私気が付いたときは、車窓は帰省のときに見慣れた風景でした。何という穏やかさ！駅々に止まってもホームには暴徒の陰もなく、物売りの笑顔が見えるのです。夢のようでした。大連に着いたのは九月二十五日ごろ。弥栄村をたつてから四十五日費やしました。

避難民第一号

大連市はソ連軍の憲兵隊が入り、暴徒はいなく静かでした。街の人の話では、憲兵の入る前は女性の被害は大変なもので、外出もできず、家にいてもいつも逃

げ口を考えていたとか。男性は男狩りを避けるため、野球帽を後ろ前にかぶり（兵隊と間違われぬように）、私が見たときには子供たちまで真似をしておりました。私たちは騒ぎが収まってからきたので、ここでも運が良かったと思います。

朝日町の実業学校に收容され、北満からの避難民第一号と呼ばれました。内地引揚げも、引揚船第一便でと約束され、希望が湧きました。学校までの長い道を、私はまだ何人かの背に負われていましたが、日本婦人たちの、おはぎや海苔巻き寿司の屋台。甘酒売りの姿を見たとき、日本内地への郷愁がつのり、涙・涙でした。先年、弥栄会で会った根本婦人が、「村長さんの奥さんが疲れ切って、何かに寄り掛かるようにして「遠いですね！」と言った姿が忘れられない」と話してくれました。母にとって、体力の限界の行進だったのでしょうか。学校に着くと、早速夕飯用に雑炊が届き、第一回目の衣類・布団類が大連市民からの配布。便所もあり、教室の板の間で安心して休みました。

第一便の船で帰されることを頼みの綱にして、越冬、

迎春。夏も過ぎ、一年二カ月間の難民生活を送りました。乗船のときは必ず一緒にと約束して、知人宅に寄宿。又は住み込みでお針子などなど、大部分は学校に残り、銘々、職を見つけて生活しました。

父たちは学校の校長室に本部を置き、軍司令部に日参、陳情して種々の便宜を図ってもらいました。農業団体というので好感を持たれ、綏化、奉天のような難題をつきつけられることなく過ぎました。大連の多勢の人にも親切にしていただけ、同胞の有り難さに心から感謝しました。亡くなった人を思うとき……無念さは、地団駄踏んで訴えても足りません。

母は、昭和二十一年四月、日本へ帰りたい、帰りたいと言いつけてましたのに、病に勝てませんでした。弥栄でお隣だった病院長夫人の藤巻スギ様も同年七月に亡くなりました。弥栄時代、二人で連れ立って買物から帰る姿をよく見掛けました。餅つきも御一緒にしました。家の前の道路を隔て並んでいる野菜畑に、あちらとこちらと二人で終日出ておりました。

綏化や途中では幼児が多く亡くなり、大連では大人

の女性が病気で亡くなりました。父は「死亡者が余り多いので慄然りっせんとする」と報告しております。私は途中の熱下げの注射で腕が腫れ、麻酔無しで三回も手術する羽目になり、大連の満鉄病院に通いました。ここで旅順高女時代の友人と会い旅順の話を書きました、敗戦となると女性への暴力は付きものよう、隣の娘さんが三人ものソ連兵に押し入られて、発狂してしまつたとか。その友も男装して旅順を脱出し、その姿で私の前に現れたのでした。もう一人の友も頭を坊主にしてスカーフをかぶっていました。私自身も通院の帰りに、人力車をひいた満人に追い掛けられ、走って店に飛び込み逃れました。兵隊のところ連れ込むのだそうです。母が神経を使った苦勞のほどがよく分かりました。

運が良かったとは言っても、一年二カ月も避難民生活を送ったのですから、それ相応の苦勞がありました。煙草売り、雑貨店の売り子、衣料店の売り子、同県人の奥さんと湯タンポ売り、最後の六カ月は浪速通りの委託販売の百貨店の売り子（時計・カメラなど）、こ

こには旅順の友達もよく訪ねてきたり、自分の着物が売れたと言つては、おしるかなどをおごってもらいました。

浪速通りは大連で一番の繁華街です。種々の人種が往来しています。敗戦国の日本人からは、隙あらば肩に掛けているシヨールまでかすめ取つて平気だった満人の小孩(子供)が、ソ連兵の姿を見ると「パパ、ママ、ニエツト、カーシヤニエツト。ジンギーダワイ」と口々に言つては、纏わりついて金品をねだつていた逞しさには恐れ入りました。

帰国

昭和二十一年十二月八日。終戦後一年四カ月で故国に帰つてまいりました。寒い大連に比べ佐世保は何と暖かかったことか。モンペも脱ぎ、スカートに素足で表を歩いてみました。安堵感、解放感がいっぱいでした。さつまいもを買いました。その甘かったこと。母に一口でも食べさせたかった。一步でも故国の土を踏ませてあげたかった。

夫はシベリアから昭和二十三年十月に帰国。私が本

籍地青森に父と住んでおりましたので、試験を受け、青森県庁に勤めました。平凡な妻の生活が始まり今日に至つております。子供は男の子二人。共に大学を出て社会人になり、結婚。私どもはただ今、長男夫婦、孫三人の七人家族同居です。十勝沖地震で家を建て直し、水害で床上一・二メートルの被害にも遭いました。けれども貧乏も、災害も、避難民、引揚者体験した身には大したことはございません。「何とか成るさ」の父の口癖を思い出します。その父も亡くなり、夫が定年を迎え、第二・第三の仕事を持ったころから、青森の豪雪に耐えられなくなり、太陽の恵みをいっぱいに浴びる土地を求めて山梨に移つてまいりました。地図でも日本の真ん中に位置し、富士山の見える所です。

同時に弥栄会の集まりにも出席。春の全国の開拓者合同の慰霊祭の拓魂祭にも参加できるようにになりました。父の字で書かれた碑も建つております。

私は近ごろふつと考えます。

私の今まで体験してきたことは、私にとって決して無駄ではなかった。むしろ生きてきた証しのようなも

のと。ただ、父にとって、あの渡満は何であつたのでしょうかと。

【執筆者の横顔】

滋子さんは弥栄村長の息女である。私と同年生まれ、弥栄では隣家だったので、ご一家から多くのご芳情をいただいたご縁がある。

滋子さんは昭和の激動の時代を身をもって体験された一人だと思う。

内地では、父君が第一次武装移民の幹部をして渡満されるのを見送り、また、二・二六事件の思い出もある。

満州では、旅順高女に学ばれたので、日露戦争を偲び卒業後は、理想農村建設中の弥栄村にて平和で発展する組合と小学校に勤務された。滋子さんは清楚な美人で、東本願寺の若奥様と共に高松宮様の接待役を務められた。お二人共、都会で何不自由ない生活だったのに、拓地においても少しも不平不満を言われず、皆さんに優しく接してくださった。

六十年前の大陸の花嫁さん方は、『鶴が掃き溜めに降りたようだ』と、そして私たちも見習って頑張りましょうと励まし合つたという。

昭和十九年結婚後、二十年四月の悲惨な通河事件では幸運にも救助された。そしてご主人の応召により弥栄の実家に帰つたとき、ソ連侵攻により避難出発の前であつた。

なお、工藤村長さんは昭和初期の農村恐慌、東北農民の将来を憂い、満州開拓の指導者として参加された。開拓は万難を克服して成功し、ほかの指導者は後続開拓団の幹部として転出された。村長さんは外柔内剛・誠実温容な卓越せる指導者で、村民の信望厚く、村の運営と発展に多大な貢献をされた。

運命の八月十二日。村長の命令で、全員が十三年宮々と築いたすべての財産を捨て、退避した。車中、緩化で多くの犠牲者があり、この地からの脱出、大連までの避難行には村長さんや幹部の懸命な配慮があつた。

その間、ソ連軍の凌辱から逃れるため、滋子さんは鍋の炭を顔に塗つたためか、高熱で意識不明の重体と

なった。多くの幼い子供が亡くなるなど、その惨状は想像を絶するものであった。

大連での一年余りの難民生活中も村長さんを中心に弥栄一家は相互扶助し、やっと祖国日本に帰ることができた。しかし、滋子さんのお母さんや私の母、その他多くの方々が帰国を前にして亡くなったことは悲痛の極みである。

帰国後、村長さんは各支部の方々と連絡を密にされ、昭和四十七年第一回弥栄会開催。そして聖蹟桜ヶ丘に村長さんの達筆な弥栄村の墓碑が建立された。以来、毎年総会を続け、本年度第二十四回で百人以上の参加者があり、先輩の偉業を称え、その精神を継承し、慰霊法要の行事を続けている。滋子さんは副会長として、ご尽力くださっている。

(弥栄会会長 藤巻 禧四郎)

終戦前後の追想

新潟県 金内 義亨

日本人のだけれども初めて体験した敗戦による終戦、時が止まったかと思うような恐怖の日夜を、満州国の奉天市で迎えた自分の姿を半世紀を経て、当時の記憶も時と共に薄れ定かでない点多々あると思いますが、まさか敗戦などとは夢想だにできなかったことで、敗戦前後の外地での強い者勝ちの世界で、いかに生き延びてきたかを、八十歳を迎え文字からも遠ざかりつつある現在、事実を語り残すべくペンを取りました。

常日ごろどんなに強がりをお口にしても、自分が今殺される、死ぬという場面に遭遇したとき、いかに対応するかによって生か死かが決まるとは想像できないと思います。目をあけていても何一つ見えず、また息をしても言葉にならず、喚くといった有様でした。しかしこれも度重なるにつれて、度胸ができてか